

## 中学生の相互独立性・相互協調性と友人関係との関連

中島 美紀\* 五十嵐 哲也\*\*

\*卒業生

\*\*養護教育講座

### Relations between Independent/Interdependent Self-Construal and Friendships among Junior High School Students

Miki NAKAJIMA\* and Tetsuya IGARASHI\*\*

\*Graduate, Aichi University of Education

\*\*Department of School Health Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### I 問題と目的

中学生をめぐる教育臨床的課題の背景の一つとして、友人関係が取り上げられることがある。例えば、暴力行為については、文部科学省の平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」で小学校6,600件、中学校39,382件、高等学校8,924件と中学校における暴力行為の発生件数が最多であることが示された。中でも、中学生の生徒間暴力は20,370件で最多であり、暴力行為に友人関係が大きく関与している状況が推測される。また中学生の不登校児童生徒数は、同じ文部科学省の報告において100,105人(2.77%)であることが示され、不登校のきっかけとして「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が第二位の多さとなっている。このことから、不登校の背景要因としても、友人関係の課題は深刻な状況にあることが示唆される。

このように、中学生にとって友人関係は様々な問題行動の背景にもなりうるものである。そもそも学校では、友人関係のストレスが多いことが分かっている(岡安・嶋田・坂野, 1992; 長根, 1991)。それは、学校という集団生活の場面では自分の意見のみを主張しては適応できず(飯田・石隈, 2002)、友人関係に配慮した行動が求められるからである。これがストレスになることがあり、問題行動につながるとも推察される。しかし、こうした状況が問題に結びつくか否かは、友人とのトラブルを避け、和を重視した関係づくりに配慮するか、それよりも自分の意見を重視し、それを主張することが大切と考えているかということに関与していると考えられる。こうした「自己」のありようの違いが実際の友人関係に影響し、さらに具体的な問題行動へと結びつく可能性があるのではないだろうか。このような自己像の問題を相互独立性・相互協

調性という。

この2つの考え方は、「文化的自己観」を個人内に援用したものである。Markus & Kitayama (1991)は、文化的自己観として相互独立的自己観 (independent construal of self) と相互協調的自己観 (interdependent construal of self) という2つの概念を挙げている。相互独立的自己観とは、自己を他者から切り離し、個性的・自立的であることを重視する価値観であり、相互協調的自己観とは、自己と他者との協調的関係を重視する価値観と考えられている。文化による比較として、高田 (1999) は、日本人青年は西欧人青年に比べて相互独立性が低く相互協調性が高いとしている。

また、相互独立性・相互協調性と心理的ストレスが関係していることが報告されている。中学生では、評価懸念の高さとストレス反応の高さに関連があり、言語的主張の高さとストレス反応の低さに関連があることが示されている。つまり、まじめで周り合わせて生活しているが、言語的主張をあまりしない場合にはストレスを溜めている可能性があるということである(奥野・小林, 2007)。

このように、中学生にとって相互独立性・相互協調性が友人関係上きわめて重要であると推測される。したがって、相互独立性・相互協調性と実際の友人関係について検討する必要があるだろう。しかし、この点に関して端的に取り上げた検討は、いまだなされていない。そこで本研究では、中学生を対象に、相互独立性・相互協調性と友人関係について検討する。相互独立性・相互協調性は自己の内面に関することであるため、友人関係の中でも特に、友人への感情を取り上げて検討する。そして実際の友人関係に対する適応状況も明らかにするため、友人適応も同時に検討していく。

## II 方法

### 1. 調査対象

A県内の公立中学校1～3年生、587名を調査対象とした。回答数は542名であったが、分析では無回答の項目があるものを全て除外した結果、有効回答479名、有効回答率は88.4%であった。なお、有効回答の学年・性別の内訳は、1年生143名（男子64名、女子79名）、2年生182名（男子87名、女子95名）、3年生154名（男子85名、女子69名）であり、合計479名（男子236名、女子243名）であった。

### 2. 調査時期と手続き

2010年9月下旬に、調査の趣旨と調査を実施するための生徒への教示法を内容とする「調査の手続き」と、調査用紙を担任教師に配付し、学級単位で担任教師の教示による集団法・自記式質問紙法で実施・回収した。倫理的配慮から無記名方式で行った。

### 3. 調査内容

フェイスシートで性別、学年について尋ねた後、以下の項目について回答を求めた。

#### (1) 中学生用相互独立性・相互協調性

奥野・小林（2005）の中学生用相互独立性・相互協調性尺度を使用した。本尺度は、「言語的主張」「評価懸念」「自己重視傾向」「他者重視思考」の4つの因子によって構成されており、合計13項目から成る。回答形式は、「全然あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「すこしあてはまる」「よくあてはまる」の5段階評定であり、傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。

#### (2) 友人に対する感情

友人に対する感情を測定するために、榎本（1999）の友人に対する「感情的側面」を使用した。本尺度は、「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」「ライバル意識」「葛藤」の5つの因子によって構成されており、合計25項目から成る。回答形式は、「まったく思わない」「思わない」「あまり思わない」「すこし思う」「思う」「とてもよく思う」の6段階評定であり、傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。

#### (3) 友人適応

友人に対する適応を調べるために、本間（2000）の学校での対人適応尺度の対友人適応のみを使用した。本尺度は、合計5項目から成る。回答形式は、「まったく思わない」「あまり思わない」「すこし思う」「とても思う」の4段階評定であり、傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。

## III 結果

### 1. 各尺度の性差・学年差

中学生用相互独立性・相互協調性尺度、友人に対する感情尺度、友人適応尺度の各下位尺度の性差についてt検定を行った結果、相互独立性・相互協調性について、男子は女子よりも、言語的主張 ( $t[477]=3.23, p<.01$ ) と自己重視傾向 ( $t[477]=2.44, p<.05$ ) が強いことが示された。また、女子は男子よりも評価懸念が強いことが認められた ( $t[477]=-2.94, p<.01$ )。それ以外の尺度では、性差はみられなかった。

学年差を明らかにするため、中学生用相互独立性・相互協調性尺度、友人に対する感情尺度、友人適応尺度の学年差について、学年を要因とする1要因分散分析を行った。その結果、相互独立性・相互協調性について、評価懸念に有意差が認められ ( $F[2,476]=3.91, p<.05$ )、Tukey法による多重比較の結果、1年生よりも3年生の得点が高いことが示された。また、友人に対する感情について、独立において有意差が示された ( $F[2,476]=3.71, p<.05$ )。Tukey法による多重比較の結果、1年生よりも3年生の方が高いことが認められた。それ以外の尺度では、学年差はみられなかった。

### 2. 相互独立性・相互協調性と友人関係との相関

中学生用相互独立性・相互協調性尺度、友人に対する感情尺度、友人適応尺度の各下位尺度についてPearsonの積率相関係数を求めた。相互独立性・相互協調性の先の分析の多くにおいて性差があることが示されたため、性別ごとにそれぞれ分析を行った。

#### (1) 男子 (Table 1)

言語的主張について、信頼・安定、独立、ライバル意識、友人適応との間で有意な正の相関がみられた。一方、葛藤との間では、弱程度ながら有意な負の相関が示された。

評価懸念について、信頼・安定、友人適応との間で有意な負の相関がみられたが、不安・懸念、ライバル意識、葛藤とは有意な正の相関が示された。

自己重視傾向について、不安・懸念、葛藤との間で有意な負の相関が、独立との間で有意な正の相関が示された。

他者重視傾向について、不安・懸念、葛藤との間で有意な正の相関が、独立との間で有意な負の相関が示された。

#### (2) 女子 (Table 2)

言語的主張について、信頼・安定、独立、ライバル意識、友人適応との間で有意な正の相関が示された。葛藤との間では、有意な負の相関が認められた。

評価懸念について、信頼・安定との間で有意な負の相関が認められた。不安・懸念、ライバル意識、葛藤との間では、有意な正の相関が認められた。

Table 1 相互独立性・相互協調性と友人に対する感情、友人適応との相関 (男子)

	友人に対する感情					友人適応
	信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤	
言語的主張	.33**	-.04	.61**	.22**	-.15*	.30**
評価懸念	-.21**	.60**	-.12	.23**	.39**	-.19**
自己重視傾向	.00	-.20**	.37**	-.04	-.17**	.01
他者重視傾向	.04	.31**	-.37**	.07	.26**	.04

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 2 相互独立性・相互協調性と友人に対する感情、友人適応との相関 (女子)

	友人に対する感情					友人適応
	信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤	
言語的主張	.25**	-.07	.67**	.17**	-.20**	.24**
評価懸念	-.21**	.70**	-.10	.33**	.43**	-.09
自己重視傾向	.03	-.17**	.50**	.11	-.12	.07
他者重視傾向	.12	.35**	-.36**	.04	.30**	.08

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

自己重視傾向について、不安・懸念との間で有意な負の相関が、独立との間で有意な正の相関がみられた。

他者重視傾向について、不安・懸念、葛藤との間で有意な正の相関が、独立との間で有意な負の相関が示された。

### 3. 相互独立性・相互協調性の群分けの設定

相互独立性・相互協調性の項目得点を用い、次のように分類した。

まず、相互独立性を示す「言語的主張」「自己重視傾向」と、相互協調性を示す「評価懸念」「他者重視傾向」に分け、それぞれの合計点を算出した。そして双方の尺度とも、対象者を高得点群（以下、相互独立性はH、相互協調性はhと表記する）、低得点群（以下、相互独立性はL、相互協調性はlと表記する）に分類することとした。分類基準は、それぞれの平均点を算出

し、対象者がそれよりも高いか低いかで分類することとした。その結果、相互独立性については、5.95以上をH、それ以下をL、相互協調性については、6.34以上をh、それ以下をlとした。

次に、以上の分類で得られた結果を組み合わせ、4分類（Hh/Hl/Lh/Ll；いずれも相互独立性尺度の分類を先に表記している。以下、同様）を抽出した。

### 4. 相互独立性・相互協調性4群による友人関係の差

友人に対する感情尺度、友人適応尺度の各下位尺度の群間差について、以上の分類によって抽出された群分けを要因とする1要因分散分析を行った。ここでも、相互独立性・相互協調性に性差が認められたことを考慮し、性別ごとに分析を実施した。

#### (1) 男子 (Table 3)

不安・懸念で有意差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、Hh群はHl群、Ll群よりも高

Table 3 友人に対する感情と友人適応の群間差 (男子)

	Hh (n=91)	Hl (n=148)	Lh (n=145)	Ll (n=95)	F値	多重比較
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)		
信頼・安定	4.22 (.91)	4.39 (.97)	4.04 (.60)	4.23 (.88)	1.80	
不安・懸念	3.33 (.82)	2.45 (.71)	3.25 (.66)	2.44 (.74)	26.12***	Hh>Hl, Ll Lh>Hl, Ll
《友人への感情》						
独立	3.93 (.97)	4.27 (.90)	3.32 (.63)	3.46 (.78)	17.87***	Hh>Lh, Ll Hl>Lh, Ll
ライバル意識	4.15 (1.15)	3.59 (1.17)	3.75 (.90)	3.20 (1.07)	6.46***	Hh>Hl, Ll
葛藤	2.89 (.76)	2.35 (.77)	2.97 (.72)	2.35 (.78)	11.52***	Hh>Hl, Ll Lh>Hl, Ll
《友人適応》						
	3.48 (.62)	3.44 (.67)	3.26 (.52)	3.47 (.54)	1.69	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

Table 4 友人に対する感情と友人適応の群間差 (女子)

	Hh (n=91)	HI (n=148)	Lh (n=145)	Ll (n=95)	F 値	多重比較
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)		
信頼・安定	4.40 (.78)	4.38 (1.00)	4.06 (.88)	4.41 (.97)	2.59	
不安・懸念	3.83 (.95)	2.75 (.79)	3.85 (.90)	2.62 (.75)	36.78***	Hh>HI, Ll Lh>HI, Ll
《友人への感情》						
独立	4.09 (.78)	4.39 (.88)	3.11 (.91)	3.30 (.85)	32.99***	Hh>Lh, Ll HI>Lh, Ll
ライバル意識	3.94 (.90)	3.37 (1.35)	3.70 (1.16)	3.10 (.96)	5.07**	Hh>Ll, Lh>Ll
葛藤	2.95 (.76)	2.17 (.75)	2.98 (.88)	2.38 (.75)	16.35***	Hh>HI, Ll Lh>HI, Ll
《友人適応》	3.58 (.48)	3.53 (.59)	3.36 (.57)	3.44 (.73)	1.77	

\*p < .05 \*\*p < .01 \*\*\*p < .001

く、Lh群はHI群、Ll群よりも高いことが示された。

独立においても有意差がみられた。Tukey法による多重比較により、Hh群はLh群、Ll群よりも高く、HI群はLh群、Ll群よりも高いことが認められた。

ライバル意識においても有意差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、Hh群はHI群、Ll群よりも高いことが示された。

葛藤においても有意差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、Hh群はHI群、Ll群よりも高く、Lh群はHI群、Ll群よりも高いことが示された。

信頼・安定と友人適応に有意差は認められなかった。

(2) 女子 (Table 4)

不安・懸念について、有意差が示された。Tukey法による多重比較を行ったところ、Hh群はHI群、Ll群よりも高く、Lh群はHI群、Ll群よりも高いことが認められた。

独立においても有意差がみられた。Tukey法による多重比較で、Hh群はLh群、Ll群よりも高く、HI群は

Lh群、Ll群よりも高いことが示された。

ライバル意識においても有意差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、Hh群はLl群よりも高く、Lh群はLl群よりも高いことが示された。

葛藤においても有意差がみられた。Tukey法による多重比較により、Hh群はHI群、Ll群よりも高く、Lh群はHI群、Ll群よりも高いことが示された。

信頼・安定と友人適応には有意差は示されなかった。

5. 相互独立性・相互協調性の各群における、友人適応と友人に対する感情との関連

友人に対する感情と友人適応について、相互独立性・相互協調性による分類の群 (Hh/HI/Lh/Ll) ごとに、男女別にPearsonの積率相関係数を求めた。

(1) 男子の「感情」と「適応」の関連状況 (Table 5)

Hh群では、友人適応と信頼・安定、独立、ライバル意識との間に有意な正の相関が認められた。

HI群では、友人適応と信頼・安定、独立との間に有

Table 5 友人適応と友人に対する感情との相関 (男子・群ごと)

		信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤
Hh群	友人適応	.81**	-.22	.54**	.38**	-.06
HI群	友人適応	.76**	-.30**	.29**	.16	-.44**
Lh群	友人適応	.66**	-.22	.24	.17	-.10
Ll群	友人適応	.74**	-.51**	.46**	.19	-.40**

\*p < .05 \*\*p < .01

Table 6 友人適応と友人に対する感情との相関 (女子・群ごと)

		信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤
Hh群	友人適応	.60**	-.42**	-.03	-.01	-.20
HI群	友人適応	.86**	-.24	.05	.29*	-.15
Lh群	友人適応	.61**	-.24*	.34**	.10	-.38**
Ll群	友人適応	.86**	.08	.31*	.28	-.45**

\*p < .05 \*\*p < .01

意な正の相関がみられた。一方、友人適応と不安・懸念、葛藤との間には、有意な負の相関が認められた。

Lh群では、友人適応と信頼・安定との間に比較的強い正の相関がみられた。

Li群では、友人適応と信頼・安定、独立との間に有意な正の相関が認められた。一方、友人適応と不安・懸念、葛藤との間には有意な負の相関が示された。

#### (2) 女子の「感情」と「適応」の関連状況 (Table 6)

Hh群では、友人適応と信頼・安定との間で比較的強い正の相関がみられた。友人適応と不安・懸念との間では、弱程度ながら負の相関が示された。

Hi群では、友人適応と信頼・安定との間で強い正の相関が認められた。友人適応とライバル意識との間では、弱程度ながら正の相関が示された。

Lh群では、友人適応と信頼・安定、独立との間に有意な正の相関がみられた。一方、友人適応と不安・懸念、葛藤との間では、有意な負の相関が認められた。

Li群では、友人適応と信頼・安定、独立との間に有意な正の相関がみられた。一方、友人適応と葛藤との間では、弱程度ながら負の相関が認められた。

## IV 考察

### 1. 相互独立性・相互協調性は、友人関係の諸側面とどのように関連しているか

#### (1) 言語的主張

男女とも、相互独立性・相互協調性と友人に対する感情の関連性は、ほぼ同様の結果となった。すなわち、言語的主張が強いと、「友達とは気持ちが通いあっている」などの信頼・安定が高いことが示された。柴橋(2001)は、自己表明をする人は他者の表明を強く望み、逆に自己表明をしない人は他者の表明を望まない傾向があることを報告している。お互いに自己表明をすることにより、心を開いて会話ができ、友人を信頼することができると考えられる。

また、言語的主張が強いと、独立が高いという結果が得られた。言語的主張というのは、「自分の意見をはっきり言う」などの質問項目から成っており、独立は友人に自分の言いたいことはきちんと伝え、友人といるときも自分を確立しているという状態を指す(榎本, 1999)。このように、これらの概念は極めて類似しており、本研究の結果は妥当なものと考えられる。

さらに、言語的主張が強いと、友達へのライバル意識が高いという結果も得られた。高坂・佐藤(2008)は、競争心を構成する下位概念として「自己アピール」というものがあると指摘している。競争心が強ければ、自己が他者より優れていることを知らしめ、容認されるような行動をとる。その手段として用いられる言語的主張の頻度が高まる、ということであろう。

加えて、言語的主張が高いと、「友達といると自分の

やりたいことができない」などの葛藤が低くなっていた。葛藤は、友人に自分のやりたいことや思っていることを伝えられないということであり(榎本, 1999)、言語的主張と負の相関関係にあることは了解できる。

言語的主張が高いと友人適応が高いという結果もみられた。大前(1997)は、アサーティブな言動ができると学校適応感が高いことを示しているが、本研究からは、友人関係に特定した適応感も高いということが指摘できる。

#### (2) 評価懸念

評価懸念が高いと、友達への不安を感じるようになることが示された。不安・懸念というのは、「自分が友達にどう思われているか気になる」など、友人との関係を意識するがゆえに友人に対して不安を感じている状態である(榎本, 1999)。他者からの評価が気になる場合、友人関係に不安を抱きやすく、友人関係上でもどう思われているかを常に気にしやすい状態にあることが理解できる。

さらに、評価懸念が高いと、ライバル意識が強くなることがわかった。宮前(2008)は、他者意識と評価懸念との間に正の相関があることを報告している。そして、他者意識の中でも外的他者意識は、「他者の服装や化粧などが気になる」などの項目から成り(辻, 1993)、他者のことを意識し、競争心につながると考えられる。これらのことから、評価懸念が高くなるとライバル意識が強くなることは、先行研究と一致していると考えられる。

また、評価懸念が高いと、葛藤も強くなることが示された。山本・田上(2003)は、葛藤を感じるような対人経験は評価懸念を高めるきっかけになると報告しており、本研究の結果はこれに一致した。

加えて、評価懸念が高いと、友人への信頼・安定が低くなることが示された。山本・田上(2003)は、評価懸念が高い大学生の特徴として、他者が自分のことを理解してくれないと感じている、と報告している。こうした不信感の背景に他者からの評価を気にする傾向が存在すること、そのことが各年代に共通してみられるのではないかと推測される。

そして、男子では、評価懸念が高いと友人適応が低くなるという結果が現れた。山岸(1997)は、自分の欲求を引っ込めてしまう傾向が強い男子は、友人関係における適応感が悪いことを報告している。評価懸念の高さは主張を抑制するように作用するため(奥野・小林, 2007)、本研究の結果はこれに一致したと考えられる。今後、評価懸念が直接的に友人適応感を低めるのか、あるいは主張性を媒介要因として友人適応感が低まるのかという点、ならびにこれが男子にのみ現れる点について、詳細な検討が必要である。

#### (3) 自己重視傾向

自己重視傾向が強いと、独立が高くなることがわ

かった。自己重視傾向の類似概念には、自己愛傾向（自分自身への関心の集中、自分自身に対する肯定的感覚）があると考えられる。自己愛傾向に関し小塩（1998）は、その構成概念として「自分の意見をはっきりと言い、自ら決断する」という項目から成る「自己主張性」があると述べている。それは、本研究で取り上げた「独立」ときわめて類似している。このことから、自分の考えや感じ方を大切にすることは、その考えを他者から左右されないことに深く関与していると考えられる。

さらに、自己重視傾向が強いと、友人への不安・懸念は低くなることがわかった。大学生の自己愛について、小塩（2004）は自己愛が高いと大学生活不安が低くなることを述べている。本研究とは対象者が異なるが、このことは、他者より自己を重視するため、他者のことが気にならないことに関与する可能性がある。

#### (4) 他者重視傾向

他者重視傾向が高いと、不安・懸念が高いことが示された。江口・濱口（2008）は、「他者配慮」が高い者ほど対人不安が高くなる傾向があることを報告しており、本研究の結果はこれに一致したと考えられる。

さらに、他者重視傾向が高いと葛藤が高いことがわかった。渡部（2008）は、相手のことを配慮する人は自分の意見を主張する前に踏みとどまる姿勢があることを報告している。本研究で用いた葛藤の尺度は、「自分の思っていることを友達に言えない」などの項目から成り、自分の意見を主張できない傾向を指すことから、結果は一致したと考えられる。

加えて、他者重視傾向が高いと独立が低くなることが示された。渡部（2008）は、他者を配慮する人は、自分の意見を主張せず相手に合わせる傾向があることを報告している。「友達と違う意見でも自分の意見はきちんと言う」などの項目から成る独立感は、自己主張の要素を含んでおり、相手に合わせる傾向が弱まると考えられる。このことから、他者重視傾向が高いと独立が低くなることは妥当だと考えられる。

#### (5) 性差

男女でほぼ同じ結果が得られたが、違う点は、男子では自己重視傾向が高いと葛藤が低いという結果が示されたものの、女子では示されなかったことである。小塩（1996）は、自己愛傾向の強い青年男子は他者に依存しないという特徴があることを報告している。葛藤は、友人に左右されてしまう状態であるため、自己愛が強いと葛藤が低いという結果は妥当であると言えるだろう。また、女子については、その相互独立性が低いことが指摘されており（奥野・小林，2005；高田，1999）、葛藤も女子の得点は低いとされる（榎本，1999）。そのため、これらの概念は女子に意識されることが少なく、関連性が見出されなかったと推測される。

## 2. 相互独立性・相互協調性の高低4群によって、友人関係の諸側面はどのように異なるか

### (1) 不安・懸念

相互協調性が高い人は低い人より不安・懸念が高いことが示され、これは男女ともに共通した傾向であった。このことから、相互独立性には左右されないことが明らかとなった。木内（1996）は、大学生を対象に、相互依存的自己理解が高いと対人不安が高いことを示している。本研究と対象年齢層は異なるが、結果は一致したと言えるだろう。また、以前から、相互依存的自己理解や対人不安は日本人特有のものだと言われている（Markus&Kitayama, 1991；土居，1971）。本研究では、中学生という発達の比較的早期の段階から、日本文化に影響された自己像のありようが対人関係に影響している可能性が示唆されたと言えよう。

### (2) 独立

相互独立性が高い人は低い人より独立が高いことが示され、これは男女ともに共通した傾向であった。このことから、相互協調性には左右されないことが明らかとなった。相互独立性というのは、個性的・自立的であることを重視する（奥野・小林，2007）ことであり、友人に対する感情の独立というのは、友人といえる時でも自分を確立している状態（榎本，1999）のことである。これらは類似概念であるため、本研究の結果は妥当であると考えられる。また、相互独立性と相互協調性は互いに影響し合わない（高田，1999）と考えられているため、友人に対する感情の独立が相互協調性に左右されないのも了解できる。

### (3) ライバル意識

男女で異なる結果が得られた。男子では、相互独立性も相互協調性も高い人（Hh群）が、相互協調性の低い人（Hl群，Ll群）よりもライバル意識が高いという結果となった。太田（2004）は、男子は女子よりも競争に関して積極的であり、かつ肯定的にとらえていると報告している。そして友人関係においては、相手と競争することによって得られる情緒的つながりや、相手の存在による自分の向上を重視する関係があると言われている。このことから、自分のことも相手のことも意識するHh群は、友人との協調的関係を重視しないHl群，Ll群よりもライバル意識が高くなると考えられる。

女子は、協調性が高い人が、独立性も協調性も低い人よりもライバル意識が高いという結果が現れた。太田（2004）によると、友人に対するライバル意識は、競争結果ではなく、情緒的つながりを重視するとされている。特に中学生女子は、男子よりも周囲との関係に敏感で、相互協調性が高いと言われており（奥野・小林，2005；2007）、友人に対して情緒的つながりを求めていると考えられる。また、他者に関心がない人はライバル意識を持たないことが報告されている（太

田, 2001)。そのため、相互協調性が高い人の方が、相互協調性が低く自分の意見をもたない傾向のある人よりもライバル意識が高くなると考えられる。

#### (4) 葛藤

相互協調性が高い人は低い人より葛藤が高いことが示され、これは男女ともに共通した傾向であった。不安・懸念と同様の結果となったが、不安・懸念は、ある特定の他者との協調的な関係を持ちたいと考え、その関係が持てるかどうかを意識することから生じる不安である(榎本, 1999)。その不安が生じた結果、相手に合わせようとし、自分の意見を言えず相手に引きずりこまれてしまう葛藤が生じるのではないだろうか。このことから、不安・懸念と葛藤は関連しており、不安・懸念と同様の結果が得られたと推察される。

### 3. 相互独立性・相互協調性の各群では、友人適応に結び付く友人への感情は異なるか

群ごとの相関関係を分析した結果、性別によってその関連性に顕著な特徴が見出された。よって、以下、男女別に考察を進めていく。

#### (1) 男子

男子では、概して相互独立性には左右されず、相互協調性の低い群における友人適応の課題が見出された。すなわち、相互協調性が低い男子は、友人へ不安や葛藤を抱き、友人からの独立感が低い場合、友人適応感が低いということが明らかとなった。

相互協調性が低い場合、他者に合わせた行動をとるのが苦手で、それを好まない傾向にある可能性がある。そのような者が、友人関係において個性を感じられず(独立)、ひきずられた感覚(葛藤)をもち、友人関係を意識せざるを得なくなってその関係性に不安を抱く(不安・懸念)場合(榎本, 1999)、優勢な自己観とは対立する状況に追い込まれ、友人適応感が低下するという状況が示唆される。特に男子の場合、自己主張する傾向が学校適応感と関連することが指摘されている(山岸, 1997)。さらに、男子は友人と一緒に活動するための基礎的なスキルを備えていることが友人関係を安定させ、ストレス反応の表出を抑制するとされる(西村・東條, 2009)。こうした指摘を踏まえると、男子にとって相互協調性が高ければ友人関係が良好になる状況が多い一方、その低さは友人関係における様々な場面で問題が生じ、ストレスの高い関係性を続けなければならなくなると推察される。

#### (2) 女子

女子は男子と異なり、概して相互独立性の低い群における友人関係の課題、もしくは相互協調性の高い群における友人関係の課題、の2点が見出された。すなわち、相互独立性が低い女子は、友人関係からの独立を感じられず、友人間の葛藤を感じている場合に友人適応が低くなることが示された。また、相互協調性の

高い女子は、友人に対して不安を抱く場合に友人適応感が低くなることが明らかとなった。

相互独立性が低い場合、自分の考えに自信を持って自己主張するような行動が苦手であると考えられる。そうであれば、友人と一体化した状態の方が居心地がよいはずであり、本研究の結果は矛盾したもののように考えられる。しかし、中学生にとって特別な存在となりうる友人との間では、たとえ自己像としては相互独立性が低くとも、その自己像と相反するような関係性をあえて築きたいという願望が生じている可能性もある。この点に関し、なぜ女子にのみこうした結果が生じたのかということも併せて、今後の詳細な検討が必要である。

さらに、相互協調性が高い場合、他者からの評価を気にし、他者の気持ちを考えた配慮行動が身につけていると考えられる。そのような者が、友人との関係性に不安を抱くことは、過剰なまでに友人からどう思われているかを気にかけざるを得なくなり、結果として、友人適応感が低下するという状況が示唆される。特に女子の場合、友人から疎外される不安感が高いことが指摘されている(脇山・中谷, 2009)。そのため、配慮行動をしても仲間から外されるかもしれないという気持ちが強いと友人適応感が低下すると推測される。

### 4. 今後の課題

以上のように、性別によって、友人適応上の課題となる自己観の様相は異なり、またその自己観によっても友人適応に関与する感情的側面は異なることが明らかとなった。したがって、学校教育において友人関係上の課題を支援するためには、こうした男女の違いとその個人がもつ自己観の状況を考慮した上で、それぞれに応じた「友人に対する感情」への介入を行う必要がある。そのことが、友人適応感を改善する具体策につながる可能性があるとして示唆される。

しかしながら本研究では、いくつかの課題が見出された。既に、学年や学校段階を踏まえた詳細な発達の状況、理想とする自己観の状況などについて検討する必要性は述べた。その他にも、友人との活動的側面(榎本, 1999)など、友人関係のより多様な状況を詳細に検討する必要がある。そして、中学生の学校生活での状況を知るためには、友人関係だけでなく、教師との関係や親子関係など、他の対人関係上の適応状況についても検討する必要がある。また、本研究で、友人関係を良好にするためには、男子では相互協調性を高めること、女子では相互独立性を高めることが重要であることが示唆された。現在の学校教育では、道徳教育や言語活動の充実がなされているが、今後、どのような取り組みをすれば高めることができるのかを明らかにする必要がある。

## 謝辞

本研究は、第一筆者が実施し、第二筆者が指導した平成22年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に快くご協力いただきました中学生の皆様、ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 江口めぐみ・濱口佳和 2008 児童の主張性のタイプと心理的特徴との関連の検討—「自己表明」・「他者配慮」による類型化— 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 501.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 榎本淳子 2005 中学生の学校適応感が学校生活満足度に及ぼす影響—有効な教師の援助とは何か— 東洋大学文学部紀要教育科学編, 31, 263-277.
- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発— 教育心理学研究, 50, 225-236.
- 伊藤葉子 2003 子どもとの相互関係における中・高校生の社会的自己効力感の発達 日本家政学会誌, 54(5), 245-255.
- 木内亜紀 1996 独立・相互依存的自己理解—文化的影響, およびパーソナリティ特性との関連— 心理学研究, 67(4), 308-313.
- 木内亜紀 1997 女子大学生とその母親の相互独立・相互協調的自己観—質問紙法による形成要因と葛藤状況の比較検討— 教育心理学研究, 45, 183-191.
- 小嶋佳子 2007 感情経験と自己意識・他者意識の関係—感情の複雑性と意識化が自己意識・他者意識に及ぼす影響— 愛知教育大学研究報告教育科学, 56, 147-154.
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 2004 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係—相互協調的・相互独立的自己観を踏まえた検討— 教育心理学研究, 52, 24-32.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 宮前淳子 2008 思春期における他者意識と評価懸念との関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 735.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究, 39, 182-185.
- 中村昭之・林潔・板津裕己 1986 学生生活の充実感について (3) 駒沢社会学研究, 18, 195-225.
- 中山留美子・中谷素之 2006 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 西村大樹・東條光彦 2009 中学生の社会的スキルと認知的評価がストレス反応に及ぼす影響 岡山大学附属教育実践総合センター紀要, 9, 1-8.
- 岡田守弘・渡田典子 1992 評価懸念および自己制御感から見た児童の学校不適応感の測定について 横浜国立大学教育紀要, 32, 151-187.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, 5(1), 23-29.
- 奥野誠一・小林正幸 2005 小学生版/相互独立性・相互協調性尺度の作成—信頼性および妥当性の検討— 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 1, 3-12.
- 奥野誠一・小林正幸 2007 中学生の心理的ストレスと相互独立性・相互協調性との関連 教育心理学研究, 55, 550-559.
- 小野智希・戸田須恵子 2002 中学生の友人関係に関する研究—活動的側面と感情的側面からの一考察— 北海道教育大学紀要教育科学編, 53(1), 1-12.
- 大前泰彦 1997 中学生の学校適応感と教師によるアサーション評定の関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 142.
- 大前泰彦 1998 中学生の学校適応感に関する研究 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 8, 33-40.
- 太田伸幸 2001 学習におけるライバルを認知する理由の検討 性格心理学研究, 10(1), 45-57.
- 太田伸幸 2004 学習場面におけるライバル認知に関する研究: ライバルの類型・友人に対する競争意識の比較 愛知工業大学研究報告A, 基礎教育センター論文集, 39, 33-43.
- 小塩真司 1996 自己愛的性格傾向と依存性: 青年男子を対象として 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 215.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 2004 自己愛傾向と大学生活不安の関連 人文学部研究論集, 12, 67-78.
- 柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12(2), 123-134.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高坂康雅・佐藤有耕 2008 青年期における劣等感と競争心との関連 筑波大学心理学研究, 35, 41-48.
- 竹尾和子 1999 自己の性差に関する状況理論からの検討—相互独立的・相互協調的自己観における性差— 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 694.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 内田智美・高橋知音 2008 学級集団内における主張行動と学級生活満足感との関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 441.
- 山岸明子 1997 児童における対人的交渉方略と適応感, 仲間からの評定の関連 順天堂医療短期大学紀要, 8, 32-43.
- 山際勇一郎・堀洋道 1991 他者との心理的距離と評価懸念の関係 教育相談研究, 29, 13-17.
- 山本淳子・田上不二夫 2001 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究, 39, 37-46.
- 山本淳子・田上不二夫 2003 思春期における対人経験と評価懸念との関連—自伝的記憶による探索的検討— 教育相談研究, 41, 21-38.
- 山本雅代 2005 青年期における性役割タイプと適応について 仁愛大学研究紀要, 3, 39-46.
- 脇山晴菜・中山素之 2009 友人グループ内外でのサポート差が学校適応感に与える影響 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 217.
- 渡部麻美 2008 4要件理論に基づく主張性と社会的情報処理及び精神的適応との関連 パーソナリティ研究, 16(2), 185-197.

(2011年8月1日受理)